

日本語教育ボランティアにおける ボランティアイメージと動機について

富 川 拓・大 東 貢 生

要 旨

2004年10月23日に発生した新潟県中越地震では数多くのボランティアが駆けつけ、現在も被災者のためにさまざまな活動を行っている。同様の災害である阪神淡路大震災からボランティアの活躍が特に目立ち始め、この10年で社会学を始めとするさまざまな分野でボランティア研究が盛んに行われてきた。

小論ではボランティア日本語教室「S」におけるインタビュー調査に基づき、ボランティア活動を行っている人々が抱くボランティアイメージと、ボランティア活動を行う動機についての検討を行う。実際にボランティア活動を行う人々が個々人で行っている定義づけ（イメージ）と従来からのボランティアの定義を比較し、同時にボランティア活動を行う動機を明らかにすることによりなぜ人々がボランティアに参加するのかを検討する。

キーワード：ボランティア、ボランティアの定義、ボランティアイメージ、動機

1. ボランティアが抱く ボランティアイメージ

人は行動選択の場面である対象や人物に付着したイメージから大きな影響を受けるものである。これをボランティアに適用すると人々はボランティアに付着したイメージから大きな影響を受け、ボランティア活動を行っていると説明することができよう。以前からボランティア研究では後述するボランティア概念の3つの定義がなされているが、実際にボランティアが抱くボランティアのイメージとはどのようなものなのか。3つの定義が実際にボランティアが抱くボランティアのイメージと重なり、活動の後押しとなっているのか。それともまったく違ったイメージが抱かれておりそのイメージが行動選択の場面で人々に大きな影響を及ぼしている

のだろうか。このような定義と実際にボランティアが抱くイメージとの関係を明らかにするために、以下ではまずボランティア研究におけるボランティア概念の定義を整理し、その後調査で明らかになったボランティアが抱くボランティアイメージと比較し検討する。

2. ボランティア概念の定義

ボランティア概念の定義では3つの代表的な定義が定着している。入江幸男は「ボランティアの条件が列举されるとき常に登場するのは、＜自発性＞＜無償性＞＜公益性＞という3つの条件である。この3つはどれが欠けても、その行為がもはやボランティアとは言えなくなるような不可欠の条件であるとともに、この3つがそろっていれば、それはボランティア活動である、と言える十分条件になっていると思われる」

(入江 1999: 5) と述べている。また入江はこの十分条件に＜創造性＞＜先駆性＞＜発見性＞＜相互性＞＜ネットワークング＞＜継続性＞＜専門性＞などの理想条件を付け加えている。

昭和30年代まではボランティアということばが使用されることはなかったという。「慈善」、「篤志」、「奉仕」、「有志」などの呼び方で現在のボランティアと同じような趣旨の活動を表現していたのである。その後カタカナことばとして定着したボランティアは「慈善」等と比較して「古くさく」なく、語感と自発性を示すという点で魅力的なことばであった。しかし同時にカタカナことばとして定着したことがボランティアという概念の「イメージの固定化」を困難にし、概念のふくらみを大きくしてしまっていたのである。カタカナのままでは直接その意味を示すことはできないため、漢字に置き換える等の方法をとる必要が出てきたのだ(原田 2000: 26-29)。そこでボランティアという概念の内容を示すために上記の＜自発性＞＜無償性＞＜公益性＞という言葉が使われるようになったのである。

自発性とは「だれかから言われてやるのではなく」自分から進んで行うことであるとされている。ボランティアの語源とされるラテン語の「ボランタス」は自由意志を意味する voluntas という言葉からできたもので、そこからボランティアと自発性の深い関係がわかる。この自発性は主体性を示す方法として捉えられている。ほかのさまざまな活動と比較して、ボランティアは主体性が顕著にみられる活動なのである(原田 2000: 37)。

次は無償性である。無償性とは「物やお金をもらうことを目的としない」ことである。しかし通常の人にとって、純粋に利他的な行為は、日常的な活動の一部としてではなく、たまたま自分にそういう機会が訪れたとき、結果としてそうしていたと気づくといった性質のものであり、日常の生活の社会関係の要素として人の行

為を「モデル化」して考える場合には、われわれは必ず何かしらの「報酬」を期待して行動する(金子1992: 149)。つまり物やお金を受け取することは目的としないが「見返り」を受けることを人は期待するものなのである。この際の「見返り」つまり「報酬」は人によって様々である。このことを金子は次のように述べている。

「その人がそれを自分にとって『価値がある』」と思い、しかも、それを自分一人で得たのではなく、誰か他の人の力によって与えられたものだと感じるとき、その『与えられた価値あるもの』がボランティアの『報酬』である。ボランティアはこの広い意味での『報酬』を期待して、行動するのである」(金子1992: 150-151)

金子はボランティアが「報酬」を受けるプロセスを「つながりをつけるプロセス」と表現している。ボランティアする側とされる側の「つながり」が、助けるつもりが助けられ、与えているつもりが与えられたという感覚をもたらすのである。以前からの「奉仕」などといった言葉ではこの感覚はうまく表現できないだろう。

公益性は「自分のためでなく」何かを行うことである。原田はボランティアの公共性により私的な生活を越え、人と人とのつながりが広くなると考え、市民活動や社会運動と関係づけている。その公共性ゆえにボランティア活動は「社会の閉塞状況」を打ち破るものとして期待され、「市民社会」を築いていくための基礎とされているのである(原田2000: 39-40)。

3. ボランティアの定義に関する問題点

上記のように一般的な3つの定義がボランティア概念には存在するわけであるが、このような定義自体が、実際にボランティア活動を行う人々を混乱させる原因ともなっているのではないか。その理由を公共性の理念を例に検討していこう。

ボランティアは「公共的」な活動でなければならないという考え方には、ある人の活動が

「私的なもの」か「公共的なもの」の二つに分類できるという前提がある。「私的な領域」と「公共的な領域」との区別が当然のようになされているのである。この点を森（森 2003：29）は次のように指摘している。

「公共的な活動によって利益を得る人間を外延的に考えてみると、それは同じ社会に属する人間であり、一般的な人間であるといえ、結局のところ別の人間の私的な利益に還元されざるを得ない。このように考えるならば『公共的』という概念は『私的でないこと』という消極的な仕方では規定しえないということになる。結局のところ、『公的な領域』は『私的所有』の集合としてしか考えられていない。そのため、公共的な領域はきわめて希薄な意味しか持ちえないのである。」

森の指摘するように「公共的な活動」を行いながら「私的な活動」であるかのように、つまり他人のために労働を提供しながら、それを「趣味」などと同様に「自発的な活動」としておこなうボランティア活動は、そもそも「私的なもの」と「公共的なもの」との区別になじまないものであると筆者は考える。公共性が以上のように曖昧であるために、同時に＜公益性＞も曖昧な意味でしか捉えることができなくなる。例えば学生がこのような定義を学ぶと、反対にボランティアに対する確固としたイメージを抱くことが難しくなってしまうだろう。＜自発性＞＜無償性＞に関しても同様にその意味が捉えにくく多義的になっている。

定義自体がこのような問題を抱えている状態で、ボランティアは実際にどのような定義づけを行っているのだろうか。ボランティア自身にとってのボランティアの定義を、ボランティアのイメージとして以下では考えていく。まずボランティアのイメージに関する既存の研究を概観しよう。大東貢生は国際ボランティアに従事しているボランティア団体の構成員に面接、電話、手紙、FAX などの方法で調査を実施し、

ボランティア活動を行っている人々が抱くボランティアの定義に関する考察を行った（大東 2002）。ここでいう定義はイメージと置き換えて理解してよいだろう。大東の考察では当事者が抱くボランティアの定義が「自発性」「無償性」「関係性」「目的志向性」「日常性」「奉仕性」というグループに分けられることが明らかにされた（大東 2002：68-72）。この調査におけるボランティアのイメージは多岐にわたっており、入江の3つの定義の＜自発性＞と＜無償性＞はそのまま「自発性」「無償性」というイメージとして表れている。ただし「無償性」イメージの中には「見返りはもとめない」という徹底したものから、「金品をもらわない」「知識や技能を得る」「人間関係が豊かになる」といった緩やかなイメージまで含まれている点に注意したい。無償性とは報酬を受け取らないという意味である。この報酬ということばを社会的に分類すると「物的報酬」「精神的報酬」「社会的報酬」の3つに分けられる。徹底した無報酬性のイメージはこれら3つの報酬すべてを否定する。しかし実際は「見返りはもとめない」と述べていても、先述の「つながりをつけるプロセス」としてのボランティアからも明白なように精神的報酬を受け取るに関しては「無償性」に抵触しないと考えられているようである。ボランティア活動独自の緩やかな「無償性」といってよいだろう。また＜公益性＞は「奉仕性」というイメージに含まれる「社会や人のため」という部分と重なるであろう。またこれら以外にも「関係性」「目的志向性」「日常性」などといったイメージも表れておりボランティアが抱くボランティアイメージの豊かさがよくわかる。

4. イメージの分析

ここからは今回の日本語教育ボランティアにおけるボランティアイメージの分析を行う。まずBさんの語りから検討してみよう。

Bさん：やはり対価を求めないことがあるし、けれども、ボランティアは与えるものだけではなく・・・、相手があるものですから、相手の立場に立って考えながら、それを旨く十分考えながら、自分の都合は、主ではなく、相手の立場に立って考えていくのがボランティア。どうしてもボランティアやってながらも、自分の都合、気持ちを押し付けていくことがボランティアにはおこりやすいので・・・。

ここでは「関係性」というBさんのボランティアのイメージが読み取れる。「関係性」とは大束らの調査結果で明らかになった「他人の立場に配慮するといったことを表すイメージ」であり（大束 2002）、入江のいう＜相互性＞をも包含するイメージである。ボランティア活動が責任を持たずに自分の好きなように行う活動ではなく、相手との関わりを重視した責任のあるものであるというBさんのイメージがよく出ている部分である。またこの部分はボランティアの＜自発性＞とも関係する。＜自発性＞は(1)自分の責任で状況を認識し(2)自分の責任で価値判断を行い(3)自分の責任で行為すること（入江 1999：7）と換言でき、その視点から考えればBさんは＜自発性＞のイメージも同時に合わせ抱いているといえる。

Bさん：よく言われるのが、教えるのではなくて、サポートする。日本語を各自が、学びたいと思っていると思っているので、応援、サポートするのが、全体のこの日本語ボランティアの主旨であるから、教えてあげるという上から下への性格ではない。ある意味では対等、一緒に勉強する、外国のことを教えてもらうことができるのであるから、余り感謝とか報酬とかいうことは考えないですね。

ここでのポイントは＜関係性＞＜無償性＞である。対等と一緒に勉強し外国のことを教えて

もらうという語りからは＜関係性＞＜相互性＞イメージが見て取れる。また一方通行の贈与ではなく、相手からの見返りもあるという点では厳格な＜無償性＞のイメージをBさんが抱いていないことがわかる。その反面あまり感謝とか報酬は考えないと語っていることから、Bさんの考える報酬とは精神的報酬の中の感謝であるとか、物的報酬であることが推測できる。何かをボランティア活動を通して学ぶということはBさんにとっては報酬にはならないようである。Bさんの中でのボランティアの＜無償性＞のイメージは緩やかなものであるといえよう。このような緩やかな＜無償性＞はDさんの語りの中にも見る事ができた。

Dさん：わたしは少し言語の方に興味がありまして。
やっぱり世界を知るとか
わたしは言語に少し興味がありましたんで。あのやっぱり日本語で知らないこともたくさんありますんで。興味あることを教えていただきますと（身体の）問題ですとか。それはすごく勉強になりますし楽しみに。

またFさんの語りの中でも同様の緩やかな＜無償性＞そして＜関係性＞＜相互性＞のイメージを確認できた。

Fさん：他人に役立って、なおかつ自分もこう納得できるというか、自己満足できる点があった方が長続きするように思いますけどね。相手に役立っている、役立っているばかりではなかなか続けるのはしんどいと思いますけどね。だからやっぱり多少でも興味があって、好きなことをやるほうがいいんじゃないかな。

今回のインタビューでは＜無償性＞＜関係性＞＜相互性＞＜自発性＞というイメージを確認することができた。特に以下のFさんの語り

が象徴的である。

「まるっきりすること大嫌いやけど、役に立つと言われているさかいにやっている」んでは。例えば、缶拾ったり、吸殻拾ったりとかでも、外で歩くのが好きやからとか、なんかこう無理でもいいから理屈付けをして「人の為にも役立っているけども、自分の為にもいいことを健康にいいことをしてるんだ」というような考えを持たんことにはなかなか続けられんように思いますがけどね。」

反面、従来の＜公益性＞に関するイメージを確認することができなかった。＜関係性＞＜相互性＞というイメージを強く持たれている人が多かったためにその他のイメージが語られなかったのだろうか。いずれにせよさまざまな領域のボランティア活動が生まれ、以前より多くの人ボランティア活動に参加するという状況の変化がボランティアが抱くボランティアイメージを変化させ多様化させていることは間違いないだろう。またこれらの現場におけるイメージの変化／多様化が、一般化しているボランティアの定義の修正にもつながると考えられるのである。

5. ボランティア活動を行う動機

なぜ人々がボランティア活動に参加するのかという素朴な疑問は誰も抱くものである。なぜボランティア活動に参加するのか、つまりボランティアの動機の問題となる。渥美公秀によれば以前の動機研究の枠組みでは、まずある人がボランティア活動に参加する時にその人の心の中には参加への動機が存在したはずだと仮定していた。研究者が動機についてその人に質問する際に、ボランティア活動に参加した人は、自らの過去を振り返り、当時の心の内部を探索して動機を探り当てて研究者に報告することが期待されていたのである。（渥美 2003：104-105）しかし活動現場におけるボランティアは、

明確な動機を語ることに困難を感じたり、むしろ積極的に明確な動機がないケースすらある。ボランティアの動機は語るに語りえないのであって、経験的な研究では、この語るに語りえない動機をボランティアに語らせてしまっているとし、反省の必要性を説いている（渥美 2003：102-103）。人々が何らかの行為を行うとき、身体内部の心に特定の動機を有し、それが保管されていて、問われれば回想できると考える方が不自然なのである（渥美 2003：106）。

このような動機の分析の限界に対し、私たちに新たな視点をもたらすのが社会構成主義的アプローチである。

中河伸俊は社会問題の研究に関連してではあるが次のように社会構築主義的アプローチについて述べている。

これまでの社会学は、社会問題の客観的实在（何らかの社会問題が問題に関わる様々な人たちは独立にたしかにそこに「ある」ということ）を前提にして研究を進めてきたのであるが、このようなアプローチにはつねに原理的な問題がつきまとう。すなわち、「社会問題」が「ある」ということや、それがどのようなもので「ある」のかということを同定するための適切な手段を社会学者がもち得ないという問題である。これに対して社会構築主義的研究はそのような客観的实在を研究の対象からはずし、ある状況を「問題」だと考え、それについてクレイムを申し立てている人々の活動へと研究関心をシフトさせた。いわば社会問題を、客観的に「そこにある」ものと見なすのではなく、むしろそこに参加する人々の活動の連鎖としてとらえ直そうという提案である。

中河の言うところの「人々の活動の連鎖」は換言すると「相互行為」「社会的コミュニケーション」である。「相互行為」「社会的コミュニ

ケーション」を通して現実には構成されるという視点が社会構成主義の特徴となる。

ではこの社会構築主義的アプローチを動機分析に適用してみよう。まず動機は人の心の中に客観的に存在するものではなく、研究者から問われたときにその場の文脈に合わせて構成される。またその構成された動機を研究者が分析するという流れである。動機はそれ自身に関する、特定の歴史・文化的文脈のもと行われる語りそのものである（渥美 2003：106）。ボランティアの動機は、動機を問う研究者と、動機を問われるボランティアがその場において協同で構築する物語なのである。以下ではまず既存の研究におけるボランティア動機分析を概観する。ここでの分析対象である動機はボランティアが心の中に抱いていたものではなく、研究者とともに構成した物語としての動機であることを念頭に置き検討したい。

入江はボランティア活動をその動機によって、①チャリティーのボランティア（他人のための道徳的行為）、②自己実現のボランティア（自分のための文化的行為）、③社会参加のボランティア（社会のための公的な行為）と分類している。また興梠は次のような動機分析を行っている。「自分の発見」「人や未知の世界との出会い」「自分らしい生き方を探る」などの内発的動機（自己実現型動機）と、「人や社会の役に立つ」「社会人としての責任」という外発的動機（問題解決型動機）とに動機を分類し、この2つにボランティア活動に「貢献」と「学び」の両義的な意味を求める「互酬性」を加えている（興梠 2003：70-71）。¹⁾ 互酬性とは外発的動機と内発的動機の両方を含むものといえよう。この互酬性とは、社会学的には自分と他人との間に生じる「返礼」の相互行為のことを指す。普通、他人に何かをもらったり逆にあげたりするとき、その返礼として何かをあげたりもらったりすることが、社会関係の最も基本的部分には認められる。またこの互酬性は個人間にも集

団間にも存在するものである。

以上のような従来の分析を基にして今回のインタビュー調査では事前にいくつかの具体的な動機を想定した。

(1)自分探し、アイデンティティーの確立(2)人間関係の形成(3)ボランティア活動の互酬性(reciprocity)の3点、そして日本語教育のボランティアに固有の動機として(4)日本語教師養成機関の代替としてのボランティア教室の利用(指導者の立場からは、日本語教師として一定レベルの能力があることを示す「日本語教育能力検定試験」に合格した後も相当な現場での実務経験が必要なことから、比較的気軽に経験を積むことが可能であるボランティアの形態を選んでいるとも考えられる)(5)日本で生活する外国の人々の役に立ちたいという思いの2点で合計5つとなる。

(1)、(2)、(4)は換言すると、他者や社会のために役立ちたいという動機ではなく、むしろ興梠の述べる内発的動機（自己実現型動機）にあたる（興梠 2003：70-71）。また(5)は「人や社会の役に立つ」というもので外発的動機（問題解決型動機）にあたる。（興梠 2003：70-71）(3)の互酬性とは外発的動機と内発的動機の両方を含むものである。このような分析を想定を基に、まずCさんのケースを検討しよう。

6. 動機分析

Cさん：思ったように異文化と接せられるなあと言うことで、僕の目的としてほんとの生の正味の相手に接せられるのがあるんじゃないかなあと。

留学生もいますし、社会人もおられるし、Tとか外国の受け入れてるところの方もおられるし、いろんな層がおられるのはいいと思うんですよ。若い人もいれば年配の人もいるし、社会人もいれば留学生もいる。そんでいろんな層、いろんな人と接せられる。思ったよりいいなあ。おはよう、こんに

ちは、さようならから始まる、外国の人と。ほんでいいなあと思って、日本語を通じて異文化に通じていると。男性もいるわ女性もいるわ、ね、自分の息子とか娘とか若い人と接することはあってもよ、なんか、そういうても、そうやな、僕ら年齢なるとそうなるやん。こういう人やからそうやない、Sの中（には）指導者（として）大学生もおるやん。現に。来年の三月で卒業終わりという人もあるよ。ほら、感覚わかるやん、はなししてて。それだけでもプラスよ。ほんなかなかな、なあばあっと行ってよ、別に飲み会するわけじゃないけど、毎日曜日一緒にいてよ、しゃべるやん。

以上がCさんが動機を語っている部分である。異文化との接触、ボランティアでしかできない外国人／若者との交流がCさんにとってボランティア活動をする動機となっているようである。また日本語を教えることは自分の勉強にもなり、ある意味目的達成でもあるとも述べていた。自己実現のボランティア、内発的動機が強く出ている典型的な例と考えられる。また同時に「助けることは当たり前」ということも語られていた。

Dさんも同様に自己実現、内発的動機を語っている。

Dさん：わたしは少し言語の方に興味があります。

やっぱり世界を知るとか。

わたしは言語に少し興味がありましたんで。あのやっぱり日本語で知らないこともたくさんありますんで。興味あることを教えていただきますと（身体の）問題ですとか。それはすごく勉強になりますし楽しみに。

主婦は家におりますとね、主婦としか付き合わないんですね。それでやはり、社会的に何かこう、こうして何かか持っていないと。その方が楽しいかなと思う。

教えること……。そうですね教える

というんですか。わたしはどちらかといえますと、その教案を作ってね、その一時間でしたら一時間の間に、どういことを、どういうふうに、どういこととてどういう風なタイミングで教材とかできるんだらうかと出しましてね、教えるんですけどね、とりたててまじめが好きです。そういったプランを立てたり、そういうのが楽しみ

またEさんの場合も自己実現、内発的動機が強く表れたケースと言えよう。まず次の箇所では「学び」として動機が語られている。

Eさん：外国人の方と接する良い機会だというのは、外国に行ってみたいとか、外国の文化とか習慣とかを直接見たりとか聞いたりとかに興味があるからです。外国に行ってみたいと思ったのは、中学校の時からです。具体的にアフリカに行ってみたかったんですよ。

また以下の箇所では人間関係の形成も同様に動機として語られている。

Eさん：ボランティアは、日本人の教えてる人たちのなかでも知り合いとかっていう方も出来ますし、向こうの人たちの風習とかも聞けるので勉強になると思うんですけど、やっぱり自分の中でプラスになると思います。経験にもなるし

この部分でもあくまでも自分にとっての「学び」が動機として繰り返し語られている。

Eさん：どっかって言うと自分が勉強しているって感じですね。日本語の勉強をして、それを教えることを自分が学んでっていう。それで一緒に話をして、「教えてる」「教えられてる」「教えてる」っていうのはそんなに思わないですね。「勉強してる」って感じの方が強いですね。外国の方の習慣などではなく、教え方とか、どうやったらわかりやすい

のかとか、これはわかってないのかとか、この人はどう考えているのかとか、どういう風に教えたらわかりやすいのかと、そういう風ですね。

Eさん：最初に教員になりたいと言いましたが、やる時はそんなにあれだったんですけども、今は「ボランティアと繋がるなぁ」と思います。やり始めるときはあんまり考えていなかったですね。そんなに色々考えてなかったですね。結果としては「そういうことが勉強になるなぁ」と。

全体を振り返るとボランティアに対して明確な動機をもって取り組んでいる傾向が顕著であるといえよう。特に「楽しいからやっている」「外国の方、若い方と交流できるから」といった明快な自己実現型、内発的動機が多く語られていた。当然その根底には外発的動機もあるのだろうが、研究者との共同作業であるインタビューでは多くは語られず、自己実現型、内発的動機が前面に出てくる結果となった。

7. まとめ

ボランティア日本語教室「S」では明確なボランティアのイメージを抱いて活動に参加している人が多かった。割り切ったボランティア像を抱いているといえる。全体として見ると、ボランティアのイメージには＜関係性＞＜相互性＞＜自発性＞＜無償性＞がよく表れていた反面、＜公益性＞イメージが語られることが無かった。

ここで問題としたいのがボランティアと学習者の関係である。ボランティアに＜関係性＞＜相互性＞を見出して活動をしているのではあるが、あくまでもその両者の関係性は教室内の限られたものとなっているようである。プライバシーを尊重し言葉以外に面での支援に対して消極的な語りも見られた。物理的な限界はあるだろうが、今後は日本語教育以外の活動の発展が

期待される。ただしこのような活動が社会システムの維持に利用される可能性には十分注意する必要がある。一般的にボランティアの＜自発性＞とは自ら進んで何かを行うこととされている。その前提となるのが「主体」である。みずから進んで何かを行うことができる「主体」なくして＜自発性＞はあり得ない。しかし現代の「主体」は再帰的に自己を創り出すことによって「主体」として存在するものであり、社会的に作り出されるものである。主体とは不確定なものなのである（関 2001）。このように考えると不確定な主体を基盤とした＜自発性＞もまた不確定なものといえよう。＜自発性＞を根拠にすることにより現在の社会システムの維持にボランティアが利用されることが懸念される。日本語教育ボランティアで考えれば、行政などではフォローできない外国人問題の解決の肩代わりを潜在的にすることとなり、行政の不備が改善されず維持されてしまうということになる。ボランティアとしてどこまで＜関係性＞＜相互性＞を追及するのかが今後の困難な課題といえよう。

注

- 1) ここで興相は内発的動機を自己実現型動機、外発的動機を問題解決型動機としている。しかし興相の視点からは後者の自己実現型動機、問題解決型動機という表現に限定すべきであろう。安易に内発的・外発的という表現を使うべきではない。よって本論では興相の枠組みを利用するため内発、外発という表現を使用するが、意味するものとしては自己実現型動機、問題解決型動機であるということを断っておく。

参考文献

- 金子郁容, 1992, 『ボランティア もうひとつの情報社会』岩波新書
大東貢生, 2002, 「当事者の考えるボランティア」
古川秀夫編著『現代日本のボランティア像』龍谷大学国際社会文化研究所
入江幸男, 1999, 「ボランティアの思想」内海成治・入江幸男・水野義之編, 『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社

森 秀樹, 2003, 「カウンター・カルチャーとしての
のボランティア」佐々木正道編著, 『大学
生とボランティアに関する実証的研究』,
ミネルヴァ書房

森岡清美・塩原勉・本間康平, 1993, 『新社会学辞
典』有斐閣

関 嘉寛, 2001, 「現代市民活動とボランティア」
内海成治編著『ボランティア学のすすめ』

興梠 寛, 2003, 『希望への力 地球市民社会の
「ボランティア学」』光生館

原田隆司, 2000, 『ボランティアという人間関係』

世界思想社.

中河伸俊, 1999, 『社会問題の社会学——構築主義
アプローチの新展開』世界思想社

本稿は, 平成15年度佛教大学特別研究助成(代表:
大東貢生)による研究成果の一部である。

(とみかわ たく

佛教大学大学院社会学研究科博士課程)

(おおつか たかお

佛教大学社会学部専任講師)

About the volunteers images and motives in a Japanese-language-education volunteer

Tomikawa taku, Otsuka takao

On the result of a survey on the voluntary Japanese school, this paper clarified (showed) the images of the volunteer activities which real volunteers have and their motives of voluntary activities. First, we took up the problems of definition of volunteers and voluntary activities and examined the relation of the images of the voluntary activities to them. Then we considered the reason why they started teach Japanese as volunteers from the motives.